令和２年度　卒業論文

『鹿男あをによし』の叙述と構成
―『坊っちゃん』との比較を通して―

大阪教育大学　教育学部
学校教育教員養成課程　小中教育専攻　国語教育コース
国語表現ゼミナール

172333　堀田ゆりあ

指導教員　野浪正隆先生

令和３年１月 29 日提出

（原稿用紙換算　188 枚）

目次

序　章　研究動機・目的
第一章　研究概要
　第一節　研究対象
　第二節　万城目学について
第二章　研究方法
第三章　登場人物について
　第一節　『鹿男あをによし』の登場人物について
　第二節　『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』の登場人物比較
第四章　『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』とに共通する場面の描かれ方から見る叙述分析
第五章　『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』の構成比較
第六章　まとめと今後の課題
　　参考文献・URL

序章　研究動機・目的

私の高校は 70 分×5 時間授業という珍しい時間割構成であった。70 分も連続で国語の授業をするのは集中力が持たないということで、授業のはじめの 10 分間に「読書タイム」が設けられていた。国語の授業は週に 3 度か 4 度あったので、自ずと「読書タイム」も 3、4 度あるということになる。初めこそお気に入りの本を読んだり、好きな作家の本を読んだりしていたが、自分の持っている本は何度も読んでしまったので、読書好きの母におすすめの本はないか聞いてみた。その時におすすめされた本が、万城目学の『鹿男あをによし』である。

『鹿男あをによし』は、関東出身の主人公がひょんなことから奈良の女子高で先生をすることになる話である。自分の出身地と近い奈良が作品の舞台であったこと、自分の夢である教師が主人公である物語であることに魅力を感じ、夢中で読んだ。さらに、ヒロインの名前が自分の苗字と同じである「堀田」であることも私の興味を引き、私にとって 1 番お気に入りの小説になった。

現実ではありえないことであるのにもかかわらず、現実と巧妙にリンクした「万城目ワールド」の虜になった。したがって、『鹿男あをによし』を通して、「万城目ワールド」にどのような仕掛けがあるのか考えたいと思った。

また、気に入って何度も何度も読んでいると、あることを発見した。主人公が「奈良健康ランド」で泳ぐ場面や、「チクリ」といたずらの板書をされている場面があること。さらには、主人公が「堀田」という登場人物に出会い、初めはいがみ合っているが、最終的に力を合わせるということである。ここから、『鹿男あをによし』は、夏目漱石の『坊っちゃん』をオマージュした点があるのではないかと感じた。

ここから、『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』の登場人物で似ているところがないか、叙述・構成で似ている部分がないか考えたいと思った。

第一章　研究概要

第一節　研究対象

『鹿男あをによし』は、2007 年 4 月 10 日に幻冬舎から出版された万城目学のデビュー二作目のファンタジー小説である。タイトルの「あおによし」とは、「奈良」につく枕詞である。関東で生まれ育った主人公が、ひょんなことから少しの間奈良の女子高で働くことになる。そこで鹿に話しかけられ、日本を救うために奮闘するという物語である。第 137 回直木賞候補に選ばれている。

『鹿男あをによし』について、万城目学が自身のエッセイにおいて

> 拙著『鹿男あをによし』を書く前、『坊っちゃん』を読み込んだので
>
> 万城目学『ザ・万歩計』文春文庫　2010 年 7 月
> 178‐179 頁

> 　それにしても偉大なことである。たった一編の小説がこうしていたるところで用いられている。この世に生まれ百年が経った今でもなお、人々に愛され続けている。『坊っちゃん』をきっかけに、長編小説を書き、わざわざ松山くんだりまでこうして風呂に入りにくる輩までいるくらいだ。
>
> 万城目学『ザ・万歩計』文春文庫　2010 年 7 月
> 181 頁

と書いているように、夏目漱石の『坊っちゃん』を下敷きにして書いた小説となっている。

『坊っちゃん』は、1906 年 4 月 1 日刊行の『ホトトギス』第九巻第七号に発表された夏目漱石の中編小説である。漱石自身が愛媛県で教鞭をとった時の経験を下敷きにして書いたものである。

『鹿男あをによし』のどのような部分において『坊っちゃん』をパスティーシュしているのかを見ていくため、叙述・構成を分析し、『坊っちゃん』との類似点、類似点から浮かび上がる相違点を探していく。

第二節　万城目学について

万城目学は、1976 年 2 月 27 日生まれ、大阪府出身の小説家である。一年の浪人生活を経て京都大学に入学し、2000 年に京都大学法学部を卒業している。2006 年、自身が 31 歳の時、第 4 回ボイルドエッグズ新人賞を受賞し、『鴨川ホルモー』で小説家デビューを果たしている。デビュー作である『鴨川ホルモー』、今回取り上げる『鹿男あをによし』の他にも映画化された『プリンセス・トヨトミ』やドラマ化された『バベル九朔』などの作品で知られている。また、エッセイに『ザ・万歩計』、『ザ・万遊記』、『ザ・万字固め』、『べらぼうくん』などの著書がある。

現実に奇想天外な空想を持ち込む、万城目学がかくファンタジーは「万城目ワールド」と呼ばれ、多くのファンに愛されている。

万城目学が自身のエッセイで

> 上手な文章とは、読みやすい文章である。試しに夏目漱石の本をめくってみる。「小難しい」というイメージとは裏腹に、日本一の文豪の文章は極めて簡素だ。一文一文が短く、すぐ「。」が来る。ゆえに、非常に読みやすい。(略)
>
> 　そこで万太郎は、執筆の前に、テンポの良い小説を読む。短い文章で構成された良質な文章を読み、そのリズムを身体に覚えさせる。そのあと、パソコンに向かうと、短いリズムが自分の文章として立ち昇ってくる。
>
> 万城目学『ザ・万遊記』集英社文庫 2012 年 5 月 202 - 203 頁

と書いてあることから、『鹿男あをによし』が『坊っちゃん』の影響を受けたということだけでなく、自身の作品作り全般において、夏目漱石に非常に影響を受けていることがわかる。

第二章　研究方法

本研究では、万城目学の『鹿男あをによし』の叙述と構成について、夏目漱石の『坊っちゃん』のパスティーシュ部分を探しながら分析する。そこから、万城目学が『鹿男あをによし』を書く際に『坊っちゃん』をどのように下敷きにしたのか考える。

方法としては、『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』の登場人物の「名前」、「性格（描写）」、「年齢」、「性別」、「趣味」、「職業」、「ニックネーム」、「顔（描写）」、「特徴」をエクセルの表にまとめる。そこから類似している登場人物と、その登場人物の類似点を抜き出し、どのような部分にそれぞれの類似点、相違点などの特徴が表れているのか考察する。（例①）

また、それぞれの小説の類似している場面の「ページ」、「行」、「本文」、「描写対象」、「備考」を抜き出してエクセルにまとめる。類似している場面の描写対象、叙述機能を分析し、そこから考えられることをまとめ、考察していく。（例②）

第五章の構成分析に関しては、はじめに『鹿男あをによし』内の主な流れ、事件を押さえ、「事件前」、「事件」、「事件後」の表を作成し、まとめる。その後、『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』の構成の類似点、相違点について比較する。（例③）

（例①）『鹿男あをによし』の主人公と『坊っちゃん』の主人公の比較

『鹿男あをによし』の主人公についてまとめたエクセルの表

名前	性格	年齢	性別	趣味	職業
おれ（主人公）	神経衰弱	28 歳	男	不明	研究員→教師（理科）剣道部顧問

顔の描写	ニックネーム	特徴
眉毛が太くて・目がぎょろぎょろしている・決して造作はよくない・少し線が細い・少なからず愛着ある顔	ねぶた祭・かりんとう兄弟	とにかくおれも腹が弱いタチだから・高校時代三年間、剣道部に所属していた。・初段・いつも姿勢がよろしい

『坊っちゃん』の主人公についてまとめたエクセルの表

名前	性格	年齢	性別	趣味
おれ（主人公）	親譲りの無鉄砲・思い切りがすこぶるいい	20 歳くらい	男	不明

職業	顔の描写	ニックネーム	特徴
物理学校の学生→教師（数学）	おれの目は格好はよくないが、大きいことにおいてはたいていな人には負けない。	坊っちゃん	華奢・不愛想・江戸っ子

このような表を登場人物ごとに作成する。『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』でそれぞれ類似している登場人物の表を比較し、表の中で一致・または類似している部分、特徴的な部分を抜き出し、次の表のようにまとめる。

	名前	性別	職業	顔	性格
主人公	不明	男	研究員→教師（物理）	眉毛が太くて目がギョロギョロしている	神経衰弱
主人公	不明	男	学生→教師（数学）	目が大きいことにおいてはたいていな人には負けない	無鉄砲

ここからわかることや表以外の情報からわかることをまとめ、『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』の類似点、相違点を考察する。

（例②）『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』の似ている場面の比較

p10 l1	君は神経衰弱だから。	p8 l1	親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている。

描写対象
『鹿男あをによし』　主人公の性格（教授の談話の記述）
『坊っちゃん』　主人公の性格・主人公の心理

叙述機能
『鹿男あをによし』　主人公のキャラクターを設定するとともに、主人公が誰かから話しかけられていることを示す。
『坊っちゃん』　主人公のキャラクターを設定するとともに、主人公視点で書かれていることを示す。

描写対象、叙述機能からわかることや、表以外の本文からわかることをまとめ、『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』を比較しそれぞれの類似点や特徴を考察する。

（例③）『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』の構成比較

『鹿男あをによし』の構成

事件前	事件	事件後
	①はじめに（主人公が少年期の話）	
大学院で研究員として働く。	②大学院の教授から教師として働かないかと提案される。	奈良県の女子高で教師をすることになる。

『坊っちゃん』の構成

事件前	事件	事件後
	①主人公が少年時代の話（清との固い絆）	
物理学校を卒業する。	②物理学校の校長から教師として働かないかと提案される。	愛媛県の中学で教師をすることになり、清と離れる。

『鹿男あをによし』、『坊っちゃん』ともに、①のように少年時代の話から始まっている。『坊っちゃん』では、一章目として少年時代の出来事が描かれているのに対して、『鹿男あをによし』では、「はじめに」として少年時代の話が描かれている。主人公が不思議な話を経験したことがないという、これから起こる不思議な話の伏線になっているのに加えて、『坊っちゃん』の構成を意識した書き出しになっているとも考えられる。

次に、②についてである。教師として働く気が全くなかった両小説の主人公に対して、『鹿男あをによし』では教授が、『坊っちゃん』では物理学校の校長が主人公に対して教師として働かないかと提案する場面が描かれる。両小説共に、今までのように故郷で働いていれば起こり得ないことが起こる、物語を展開させる大きなカギとなる場面となっている。

このように、それぞれの構成を表としてまとめた後、構成における類似点に番号をつけ、類似点や相違点についてまとめる。

第三章　登場人物について

第一節　『鹿男あをによし』の登場人物について

次の表のように、『鹿男あをによし』の主人公以外の重要な登場人物は、昔城都があった場所など、歴史に絡めて名づけられている。

名前	由来
堀田イト	『坊っちゃん』の山嵐の苗字「堀田」に邪馬台国、卑弥呼の後継者である「壱与（イヨ)」、「台与（トヨ)」から。
小治田（教頭）	推古天皇が設置したと言われている、奈良県高市郡明日香村豊浦の小治田宮から。
藤原	天武天皇が都作りを計画したとされる、奈良県橿原市木之本町の藤原京から。
福原重久	平清盛が都としようとしたとされる、兵庫県神戸市兵庫区平野の福原京から。
長岡	桓武天皇によって平城京から遷された、京都府向日市、長岡京市、大山崎町と京都市の一部の長岡京から。
南場	飛鳥時代、奈良時代にかけて大阪が日本の都であったと示す、大阪府大阪市中央区法円坂の難波京から。
大津（校長）	天智天皇が設置したと言われている、滋賀県大津市神宮町の大津京から。

また、主人公は、鹿島神宮（茨城県）の祭神である「武甕槌大神」のことを下敷きして設定が考えられている。鹿島神宮の祭神である武甕槌大神が、九州から奈良に向かっている桓武天皇を窮地から救ったという言い伝えがある。この逸話と『坊っちゃん』を取り合わせて、東日本の茨城県から西日本の奈良県で教師をするというキャラクター設定になったと考えられる。

第二節　『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』の登場人物比較

この節では、『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』の登場人物を分析し、万城目学が『鹿男あをによし』の登場人物を考える際に『坊っちゃん』の登場人物をどれだけ下敷きにしたのか考えていく。ここでは初めに、『鹿男あをによし』の解説において児玉清が似ているとかいている登場人物ごとに類似している部分を分析し、次に児玉清がかいていないが類似している登場人物ごとの類似点を分析する。

児玉清による解説で似ている人物として出てくる登場人物は、『鹿男あをによし』:『坊っちゃん』の順に、主人公：主人公、堀田：堀田、藤原君：古賀、小治田教頭：教頭、長岡先生：マドンナ、下宿のばあさん：下宿の婆さんである。

児玉清の解説には出てきていないが、類似していると考えられる登場人物は、『鹿男あを

によし』:『坊っちゃん』の順に、重さん：吉川、大津校長：校長、母：清、南場先生：古賀である。重複している人物もいるが、『鹿男あをによし』の登場人物を考える際に必ずしも一対一をモデルとして考えたとは言い切れないので、類似部分がある人物に関しては重複を許して考える。

表は、類似している、または特徴的な部分のみを切り取り載せる。また、表は全て上から『鹿男あをによし』、『坊っちゃん』の登場人物の順番になっている。下宿のばあさん：下宿の婆さんの比較からは、効果的に表を用いることができないと判断したため、表は省いている。

主人公：主人公

	名前	性別	職業	顔	性格
主人公	不明	男	研究員→教師（物理）	眉毛が太くて目がギョロギョロしている	神経衰弱
主人公	不明	男	学生→教師（数学）	目が大きいことにおいてはたいていな人には負けない	無鉄砲

上の表の「名前」のところから、両小説ともに主人公の名前が作品内に出てきていないのが大きな特徴としてあげられる。また、「職業」については、物理の教師、数学の教師とともに理系である点、両小説ともに主人公が初めから教師として働いているのではなく、物語の序盤で他の登場人物から提案されて教師になるという点が類似している。

「顔」の部分についても、目が大きいという共通した特徴があると言える。容姿についてはこの表にまとめている部分以外にも、『鹿男あをによし』の主人公が「線の細いところもある」（万城目学『鹿男あをによし』幻冬舎文庫　2010 年 4 月　13 頁 5 行目）と描かれており、『坊っちゃん』の主人公が「華奢で小作りにできている」（夏目漱石『坊っちゃん』角川文庫 1955 年　34 頁 5 行目）と描かれているように、両者ともに華奢である人物設定になっている。

次に性格については、『鹿男あをによし』の主人公は「神経衰弱」、『坊っちゃん』の主人公は「無鉄砲」と、大きく異なるように感じられる。しかし、『鹿男あをによし』の解説にて、

> この物語の導入部分が実に愉快で楽しく面白くユーモアもあり、読者は主人公の「おれ」に微笑ましい共感を覚え、すっと感情移入させられる。クリックして迂闊にも他人の大事なデータを消してしまうなんて、なんともドヂで可愛らしい。可笑しみの中から、出世の道を踏み外してしまった哀感も漂ってくる。競い合う仲間の中では、ついはみ出してしまう一途さと喧嘩っ早い性格にも親しみが湧く。上司に抜け目なく取り入り、さっさと出世の階段を登っていくタイプの男ではなく、他人を陥れたりする人間でもない。が、理不尽なことや横しまな人間には腹を立て真正面からぶつかっていってしまう、少々無鉄砲で正義感の強い男でもある。読みながら、ふと、心の中に立ち上ってくるのは、あの夏目漱石の名作「坊っちゃん」だ。

児玉清　解説　万城目学『鹿男あをによし』幻冬舎文庫　2010 年 4 月　447 頁

と児玉清が語っているように、喧嘩っ早く、無鉄砲で正義感の強い部分が類似している。

表に載せている部分以外にも類似点が見つかっている。『鹿男あをによし』の主人公は出身地が正確に記されていないが、「東京の右のへんにあるやつじゃない」(万城目学『鹿男あをによし』幻冬舎文庫　2010 年 4 月　25 頁 16 行目)、「初詣には毎年、凄まじい人でごった返す鹿島神宮まで連れていかれたものである」(万城目学『鹿男あをによし』幻冬舎文庫 2010 年 4 月　42 頁 5 - 6 行目）とあることから、主人公の出身地は茨城県であると推測できる。したがって、『鹿男あをによし』の主人公は茨城県から奈良県、『坊っちゃん』の主人公は東京都から愛媛県に教師として赴任したことがわかり、両者とも関東から西日本へ教師として働きにくるという部分が共通している。

堀田：堀田

名前	性別	職業	顔	特徴
堀田イト	女	生徒	目が少し離れている・野生的魚顔・小作りでかわいらしい顔	顔色が悪い・剣道をしている
堀田（山嵐）	男	教師	韋駄天のような顔・たくましい毬栗坊主	生徒に人望がある・負けず嫌い

次は、『鹿男あをによし』ではヒロインとして登場し、『坊っちゃん』では、主人公にとって、愛媛県でできる唯一の友達である堀田についてである。堀田に関しては、「堀田」という名前が一致している以外の共通点は見つかりにくい。

しかし、次の第四章で詳しく分析しているが、板書によるいたずらを堀田が扇動しているという噂が立つ点や、主人公と出会い、初めはいがみ合っているが、後に力を合わせて戦うことになるという点が一致している。

藤原君：古賀

名前	性別	職業	ニックネーム	顔	性格
藤原君	男	教師（歴史）	かりんとう	豆のようなのっぺりとした顔・豆のように平坦な顔	能天気
古賀	男	教師（英語）	うらなり	蒼くふくれている・冬瓜の水膨れのよう	君子

続いて、『鹿男あをによし』では主人公の一番の友人である藤原君、『坊っちゃん』では主人公が尊敬している人物として登場する古賀についてである。「職業」が教師であり、教科は異なるものの、文系であることが共通している。

藤原君はいつもかりんとうを食べているため、「かりんとう」というニックネームがつい

ている。それに対して、古賀はうらなりの唐茄子ばかり食べているから「うらなり」というニックネームがついたのではないが、顔が蒼くふくれており、「百姓になるとあんな顔になるかと清に聞いてみたら、そうじゃありません、あの人はうらなりの唐茄子ばかり食べるから、蒼くふくれるんですと教えてくれた。」（夏目漱石『坊っちゃん』角川文庫 1955 年　29 頁 2 - 4 行目）というエピソードから主人公にうらなりの唐茄子ばかり食べていると勝手に決めつけられて「うらなり」というニックネームになっている。よく食べているもの（食べていると主人公が推測したもの）がニックネームになっているという点が一致している。

さらに、『鹿男あをによし』では、「第六十回大和杯親睦会」の宴会のあと、主人公とともに帰る人物が藤原君であり、『坊っちゃん』では「うらなり君の送別会」のあと、主人公とともに帰ったのが古賀である。主人公と親しく、主人公が藤原君、古賀に対して好感を持っている点が一致している。しかし、性格については藤原君が「能天気」、古賀が「君子」となっており、キャラクター設定としては大きく異なっている。

小治田教頭：教頭

名前	性別	職業	ニックネーム	趣味	顔・服装	性格
小治田	男	教頭（歴史）	リチャード	ゴルフ	貫禄のある容貌･見事な銀髪･高価そうなスーツ	どこまでも誠実
不明	男	教頭（文学士）	赤シャツ	釣り	フランネルのシャツ・苦労千万な服装・赤シャツ	親切･女みたい

次に、教頭である。両作品ともに、校長と比べていかにもしっかりしたイメージの、仕事ができる男として物語中に登場する点が類似している。「ニックネーム」は、両者ともに見た目からそのままつけられた形になっている。「顔・服装」については、一致しているとまでは言えないが、それぞれ時代にあった、こじゃれた服装をしている人物設定となっている。

「趣味」については、次の第四章でも詳しく分析するが、両作品ともに主人公と、教頭の趣味を嗜む場面が書かれている点が類似している。

また、「性格」については、両者ともに初めは人当たりがよく、誠実で親切なキャラクターとなっている。しかし、最終的には両作品ともに主人公の敵となるという点も類似している。

長岡先生：マドンナ

名前	性別	職業	ニックネーム	顔・髪型・印象
長岡	女	教師（数学）	マドンナ	ひるがえった長い髪と口元に浮かんだかすかな笑み・とてもきれいな人・右肩から垂れたウェーブのかかった髪・心地いい香り・相当な美人・決して派手な顔つきではない・知性を感じさせる秀でた額・穏やかそうな眼差し・控えめな笑みが常に漂う口元・落ち着いた風情・えもいわれぬ気品がある・「華」がある・心に留めずにはいられない、静かなれど奥深い余韻がある・すっと伸びた長い首筋は未だまぶしいくらいに白い。・瞳が透き通っている・目尻の横には、小さなほくろ・目は大きい・おちょぼ口じゃない・頬もしゅっとしている・薄い色素の瞳・澄んだ瞳
遠山	女	不明	マドンナ	色の白い、ハイカラ頭の、背の高い美人・一番の別嬪さん・まったく美人に相違ない・なんだか水晶の珠を香水で暖ためて、掌へ握ってみたような心持ちがした

続いては、『鹿男あをによし』の、京都女学館の剣道部顧問として働く「マドンナ」こと長岡先生と、『坊っちゃん』の、古賀と婚約していたにもかかわらず、教頭である赤シャツと交際している「マドンナ」こと遠山についてである。

表からもわかる通り、「ニックネーム」が両者ともに「マドンナ」であることが一致している。

また、両小説において、「マドンナ」は容姿について詳しく記述されている点も類似している。容姿や印象が記述されている中でも特徴的であるのは、『坊っちゃん』に出てくるマドンナが「なんだか水晶の珠を香水で暖ためて、掌へ握ってみたような心持ちがした」（夏目漱石『坊っちゃん』角川文庫　1955 年　107 頁 11‐12 行目）と描かれており、『鹿男あをによし』でマドンナが「その滑らかな手触りを確かめていると、いつの間にか廊下で目撃した女性のシルエットを思い浮かべていた。」（万城目学『鹿男あをによし』幻冬舎文庫 2010 年 4 月　58 頁 5 行目）と描かれている点である。両者ともに、美しさを触覚で表現されているという点が類似している。

ばあさん：婆さん

両小説共に、主人公が下宿として利用する場所に住んでいるばあさんについてである。『鹿男あをによし』では、「鹿化が始まってから、ばあさんの弁当がやけに塩辛く感じられる。重さんに訊いても、別にそんなことはないという。ということは、おれの味覚の問題ということか。最近は肉類も急に苦手に感じてきた。野菜炒めを食べていても、肉よりもピーマンを先に探す始末だ。」（万城目学『鹿男あをによし』幻冬舎文庫 2010 年 4 月　220 頁 11‐14 行目）、『坊っちゃん』では、「見ると今夜も薩摩芋の煮つけだ。ここのうちは、いか銀よりも丁寧で、親切で、しかも上品だが、惜しいことに食い物がまずい。きのうも芋、お

とといも芋で、今夜も芋だ。」（夏目漱石『坊っちゃん』角川文庫 1955 年　104 頁　13 - 15 行目）とあるように、主人公から食事について良くない印象を抱かれている所が類似している。

また、『坊っちゃん』の下宿の婆さんがかなりなまっているキャラクター設定となっており、「そうじゃろうがな、もし。」（夏目漱石『坊っちゃん』角川文庫　1955 年　97 頁 1 行目）、「本当にそうじゃなもし。」（夏目漱石『坊っちゃん』角川文庫　1955 年　99 頁 2 行目）というような話し方をしている。そして、『鹿男あをによし』のばあさんが、「先生、『坊っちゃん』とは何ぞなもし」（万城目学『鹿男あをによし』幻冬舎文庫　2010 年 4 月　121 頁 16 行目）と、『坊っちゃん』の婆さんを知っている上で真似する場面が描かれている。この場面を入れることで、万城目学が『坊っちゃん』をパスティーシュして『鹿男あをによし』を描いていることを読者に認識させたいと考えられる。

ここまで、『鹿男あをによし』の解説において児玉清が、この登場人物どうしが似ているとかいていたキャラクターたちの類似点、相違点を見た。ここからは、他にも下敷きにして描いたと考えられるキャラクターを比較し、類似点を見ていく。

重さん：吉川

『鹿男あをによし』に出てくる重さんは、主人公が住む下宿のばあさんの孫であり、主人公と同じく奈良女学館で働いている。主人公とともに通勤しており、主人公との仲は良い。一方『坊っちゃん』の吉川は、教頭である赤シャツの太鼓持ちをしており、主人公とは敵対する人物である。

一見共通点がないようだが、重さんは落語好きの人物として描かれている。吉川は「べらべらした透綾の羽織を着て、扇子をぱちつかせて」（夏目漱石『坊っちゃん』角川文庫 1995 年　29 頁 15 行目）とあるように落語家風の服装をしている。「落語」に関係しているという部分が類似している。

大津校長：校長

『鹿男あをによし』の校長が「六十を少し過ぎたくらいなのだろうが、髪がすっかり抜けきっているものだからずいぶん歳に見える。一方で、盛大に飛び出した腹と血色のいい頬からは、教授よりよほど健康な印象を受ける。」（万城目学『鹿男あをによし』幻冬舎文庫 2010 年 4 月　59 頁 8 - 10 行目）と描かれており、『坊っちゃん』の校長は「校長は薄髭のある、色の黒い、目の大きな狸のような男である。やにもったいぶっていた。」（夏目漱石『坊っちゃん』角川文庫 1955 年　26 頁 3 - 4 行目）と描かれている。「血色のいい頬」という描写から、『鹿男あをによし』の校長の方が明るい印象を受けるが、「盛大に飛び出した腹」という部分において、「狸」というニックネームがある『坊っちゃん』の校長のキャラクター設定を意識していると考えられる。

母：清

『鹿男あをによし』における母と『坊っちゃん』における清については、主人公の出身地から勤務地の主人公に手紙を出すというところが類似している。また、『鹿男あをによし』

の母が主人公に対して「ついでに母は「純な心を持っている証拠だ」と無理やりおれを褒めてくれた。」（万城目学『鹿男あをによし』幻冬舎文庫 2010 年 4 月　7 頁　9 行目）と褒めている場面がある。『坊っちゃん』において、清が主人公に対して「清は時々台所で人のいない時に「あなたはまっすぐでよい御気性だ」とほめることが時々あった。」（夏目漱石『坊っちゃん』角川文庫 1955 年　12 頁　9 - 10 行目）という場面がある。両小説共に少年である主人公を無条件にほめている場面である。このような部分から、母と清のキャラクター設定が類似していると言える。

『坊っちゃん』における清は主人公の行動や考え方の軸となっている重要人物であるが、『鹿男あをによし』における母は清ほど重要な人物としては描かれていない。しかし、電話のある時代の物語であるにもかかわらず、母が主人公に手紙を送ってくるという設定は、清を下敷きにして考えたからであると考えられる。

南場先生：古賀

両者ともに、顔・体型が野菜に例えられている点、マドンナに振られる点が一致している。

南場先生は「底の土が硬いせいで横に広がってしまった大根に似ている」（万城目学『鹿男あをによし』幻冬舎文庫 2010 年 4 月　145 頁 2 - 3 行目）、古賀は上の「藤原君：古賀」の部分でも書いた「うらなり」と野菜に例えられている。

このように、非常に細かい類似点もあるが、万城目学が『鹿男あをによし』の登場人物を考える際、細部まで『坊っちゃん』の登場人物を下敷きにして考えたと言える。

第四章　『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』とに共通する場面の描かれ方から見る叙述分析

この章では、『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』において共通、類似している出来事、キーワードがそれぞれの小説でどのように登場しているのか、それぞれの叙述のされ方にどのような特徴があるのかを見ていく。

両小説からそれぞれ共通・類似する部分の本文を引用し、表にまとめ、それぞれの描写対象とそれぞれの作品における叙述機能を分析する。本文を引用し、作成する表は、左側『鹿男あをによし』右側『坊っちゃん』となるようにする。

p10 l 1	君は神経衰弱だから。	p8 l 1	親譲りの無鉄砲で子供の時から損ばかりしている。

描写対象

『鹿男あをによし』　主人公の性格（教授の談話の記述）

『坊っちゃん』　主人公の性格・主人公の心理

叙述機能

『鹿男あをによし』　主人公のキャラクターを設定するとともに、主人公が誰かから話しかけられていることを示す。

『坊っちゃん』　主人公のキャラクターを設定するとともに、主人公視点で描かれていることを示す。

『鹿男あをによし』の「はじめに」部分を除く両小説のかき出し部分である。主人公の性格の描写から始まっている。一見正反対の性格であるようであるが、後に『坊っちゃん』で「神経衰弱」という記述がある。それを下敷きにして『鹿男あをによし』の主人公のキャラクター設定がされたと考えられる。

p12 l 9	茶をすすりながら、きみは教員免許を持っているかと教授は訊ねてきた。大学四年生の時に取りましたと答えると、教授はおもむろにうなずき、きみ、教師として働くつもりはないかい？と唐突に話を持ちかけてきた。	p19 l 9	卒業してから八日目に校長が呼びに来たから、何か用だろうと思って、出かけていったら、四国辺のある中学校で数学の教師がいる。月給は四十円だが、行ってはどうだという相談である。俺は三年間学問はしたが実をいうと教師になる気も、田舎へ行く考えも何もなかった。もっとも教師以外に何をしようというあてもなかったから、この相談を受けた時、行きましょうと即座に返事をした。これも親譲りの無鉄砲がたたったのである。
p16 l 10	奈良行きの申し出を受ける旨を伝えると、教授は笑みを浮かべ、きっといい経験になると思うから、存分に勉強してきなさいとおれの肩をぽんと叩いた。		

描写対象

『鹿男あをによし』　p12 教授の行動・主人公の行動・教授の行動
P16 主人公の行動・教授の行動

『坊っちゃん』　主人公の状況・主人公の心理・主人公の行動・校長の行動・主人公の心理・主人公の行動・主人公の心理

叙述機能

『鹿男あをによし』　教授の行動を細かく描くことで、視点人物である主人公が教授の行動を細かく観察していることを示している。

『坊っちゃん』　主人公の状況、行動、校長の行動に対する主人公の心理描写を細かく行うことでキャラクターの性格を提示している。

両小説ともに、東日本に住んでいる主人公が西日本で教師になるきっかけの部分である。『鹿男あをによし』では、教授の行動ベースで奈良行きが決まるのに対して、『坊っちゃん』では、主人公の心理・行動ベースで四国行きが決まる。また、『鹿男あをによし』の主人公が奈良に行くことを決めるのに 5 ページかかっているのに対し、『坊っちゃん』の主人公はたった 4 行で四国行きを決めている。この相違点から主人公の性格の違いを読み取ることができる。

p13 l 14	そもそもおれは生まれてこの方、箱根より西に行ったことがない。	p20 l 2	生まれてから東京以外に踏み出したのは、同級生といっしょに鎌倉へ遠足した時ばかりである。今度は鎌倉どころではない。たいへんな遠くへ行かねばならぬ。
		p21 l 11	「西の方だよ」と言うと「箱根のさきですか手前ですか」と問う。ずいぶんもてあました。
		p111 l 9	こんなことを清にかいてやったらさだめて驚くことだろう。箱根の向こうだから化物が寄り合ってるんだと言うかもしれない。

描写対象

『鹿男あをによし』　主人公の状況

『坊っちゃん』p20　主人公の状況・主人公の心理

P21　主人公の談話・清の談話・主人公の心理

P111 主人公の心理

叙述機能

『鹿男あをによし』　主人公の状況を描くことで、奈良に行くことになった主人公の戸惑いをあらわしている。

『坊っちゃん』　清の談話や清の行動を予想する主人公の心理を描くことによって、主人公にとっての清の存在の大きさを提示している。

両小説共に「生まれて」はじめて出身地から遠く離れることになること、「箱根」を過ぎることがあらわされている。描写対象や叙述機能は異なる部分が多いが、「箱根」というキーワードが一致することにより『鹿男あをによし』が『坊っちゃん』のパスティーシュであることが色濃くでる部分である。

p28 l2	ちょうど最後の生徒が自己紹介を終えたあたりで授業終了のチャイムが鳴った。おれは出席簿を閉じると、一目散にドアに向かった。ドアを出た途端、教室の中でわっと大きな声が上がったが、かまわず職員室に向かった。もとい、職員室の手前にある男性職員用トイレに向かった。 不安が募ると無性に腹がゆるむ。情けない癖があったもんだ。嫌な予感は朝からくすぶっていたが、まさか一限目からこんな目に遭うとは。便器に座ってうなだれながら、おれは膝の上に出席簿を広げた。	p33 l7	いよいよ学校へ出た。初めて教場へはいって高い所へ乗った時は、なんだか変だった。講釈をしながら、おれでも先生が勤まるのかと思った。生徒はやかましい。時々ずぬけた大きな声で先生という。先生にはこたえた。今まで物理学校で毎日先生先生と呼びつけていたが、先生と呼ぶのと、呼ばれるのは雲泥の差だ。なんだか足の裏がむずむずする。おれは卑怯な人間ではない、臆病な男でもないが、惜しいことに胆力が欠けている。先生と大きな声をされると、腹の減ったときに丸の内で午砲を聞いたような気がする。

描写対象

『鹿男あをによし』　主人公の状況・主人公の行動・生徒の行動・主人公の行動・主人公の心理・主人公の行動

『坊っちゃん』　主人公の行動・主人公の心理・主人公の状況・主人公の心理

叙述機能

『鹿男あをによし』　主人公の状況、行動、心理が描かれ、キャラクターの性格を提示している。短い文を重ねて描くことで、特に主人公の焦りが表現されている。

『坊っちゃん』　主人公の行動、心理、状況を描くことで、キャラクターの性格を提示している。

主人公がはじめて授業を行う場面である。両小説ともに、主人公は、緊張・焦りがお腹にきていることがわかる。『鹿男あをによし』では主人公やその近くの人物の行動描写が多く描かれ、行動描写によって主人公の心理を予想させるものとなっていることが多い。対して『坊っちゃん』は主人公の心理描写が多くなっている。

p31 l 15	このままじゃ、おれはまるで道化だ。人を馬鹿にしておいて褒められるなんて法があるものか。おれは大いに反論にうって出た。だが、昔からの癖で、興奮すると急に言葉がでてこなくなる。言いたいことの半分も言えなくなる。机に置いた出席簿に無駄に唾が飛ぶばかりで、おれの気持ちは一向に教師連中には伝わらない。	p86 l 13	おれはこう考えて何か言おうかなと考えてみたが、言うなら人を驚かすようにとうとうと述べたてなくっちゃつまらない、おれの癖として、腹がたったときに口をきくと、二言か三言で必ず行きつまってしまう。狸でも赤シャツでも人物からいうと、おれよりも下等だが、弁舌はなかなか達者だから、まずいことをしゃべって揚足を取られちゃおもしろくない。
		p109 l 11	おれは会議やなんかでいざときまると、咽喉がふさがってしゃべれない男だが、ふだんはずいぶん弁ずるほうだから、いろいろ湯壺の中でうらなり君に話しかけてみた。
		p133 l 15	そうして、きまった所へ出ると、急に溜飲が起こって咽喉のところへ、大きな丸が上がってきて言葉が出ないから、君に譲るからと言ったら、妙な病気だな、じゃ君は人中じゃ口はきけないんだね、困るだろうと聞くから、なにそんなに困りゃしないと答えておいた。

描写対象

『鹿男あをによし』　主人公の心理・主人公の行動・主人公の心理・主人公の状況

『坊っちゃん』p86　主人公の心理

p109 主人公の心理・主人公の行動

p133 主人公の行動・堀田の行動・主人公の行動

叙述機能

『鹿男あをによし』　主人公の心理、行動、状況を描くことで、キャラクターの性格を提示している。

『坊っちゃん』　主人公の心理、行動を描くことで、キャラクターの性格を提示している。

両小説ともに、主人公が興奮したり緊張したりすると急に言葉が出てこなくなってしまうということをあらわした場面である。「神経衰弱」と「無鉄砲」の大きく異なる性格であるはずであるのに、このような細かい性格の一致点が多く挙げられる。

p39 l1	昨日、届いたばかりの、母からの手紙だった。昨日は祝日で学校も休みだったが、荷物に整理に忙しく、軽く目を通したきり放ったままになっていた。その手紙をおれはもう一度初めから丹念に読み返した。	p103 l2	おれはせっかちな性分だから、こんな長くて、わかりにくい手紙は五円やるから読んでくれと頼まれても断るのだが、この時ばかりはまじめになって、始めからしまいまで読み通した。読み通したことは事実だが、読むほうに骨が折れて、意味がつながらないから、また頭から読み直してみた。
p39 l3	といっても、枚数は便箋に三枚で、一行ずつ空けて書くうえ、一字一字が饒舌な草書体なものだから、内容はほとんどない。	p103 l1	字がまずいばかりでない、たいてい平仮名だから、どこで切れて、どこで始まるのだか句読をつけるのによっぽど骨が折れる。
p118 l9	母からの手紙は相変わらず、字が達者すぎて読みにくい。予想に反しておれのことはほとんど書いていない。		
p39 l4	お前はいびきはいいがはぎしりがひどいから、家の方々の迷惑にならないようにしろとか、西のほうはきっと味付けが薄いから、出た食事に味が足りないと勘違いして醤油をかけるなとか、自分も女子高を出ているからわかるが、あの年頃の娘はとにかく意地が悪いから気をつけろとか、好き勝手書いてある。	p103 l11	坊っちゃんは竹を割ったような気性だが、ただ肝癪が強すぎてそれが心配になる。——ほかの人にむやみにあだ名なんか、つけるのは人に恨まれるもとになるから、やたらに使っちゃいけない。もしつけたら、清だけに手紙で知らせろ。(略) ——なるほど女というものは細かいものだ。
p117 l11	家に戻ると、ばあさんが手紙だようと封筒を渡してくれた。裏返すと母からである。	p102 l2	それから二、三日して学校から帰るとお婆さんがにこにこして、へえお待ちどうさま。やっと参りました。と一本の手紙を持って来てゆっくり御覧と言って出て行った。取り上げて見ると清からの便りだ。

描写対象

『鹿男あをによし』p39l1　主人公の状況・主人公の行動
p39l3　母の手紙・主人公の心理
p118　主人公の心理
p39l4　母の手紙の内容・主人公の心理
p117　主人公の行動・ばあさんの行動・主人公の行動

『坊っちゃん』 p103 l 2　　主人公の心理・主人公の行動
p103 l 1　　清の手紙・主人公の心理
p103 l 11　　清の手紙の内容・(略)・主人公の心理
p102　　主人公の行動・婆さんの行動・主人公の行動

叙述機能
『鹿男あをによし』　主人公の状況、行動以外に、母の手紙、母の手紙に対する主人公の心理を描くことでキャラクターの性格を提示するとともに、主人公の母に対する気持ちをあらわしている。
『坊っちゃん』　主人公の行動、心理を主に描くことでキャラクターの性格、主人公の清に対する気持ちを提示している。

主人公のもとへそれぞれ母、清から手紙が届く場面である。『鹿男あをによし』は 2007 年に出版されているため、多くの人が携帯電話・固定電話を持っていたと考えられるが、あえて「手紙」が届く設定となっている。
また、主人公が手紙を読み返す点、母・清の字が汚い点、手紙の内容、下宿のばあさんから手紙を渡される点が類似しており、『鹿男あをによし』が『坊っちゃん』の手紙部分をパスティーシュしていることが色濃く出ている場面となっている。

p46 l 4	出だしは悪くなかった。	p33 l 13	最初の一時間はなんだかいいかげんにやってしまった。しかしべつだん困った質問もかけられずにすんだ。

描写対象
『鹿男あをによし』　主人公の心理
『坊っちゃん』　主人公の行動・主人公の心理

叙述機能
『鹿男あをによし』　主人公の心理をネガティブに描き、キャラクターの性格を提示している。
『坊っちゃん』　主人公の行動・心理を描き、キャラクターのポジティブな性格を提示している。

主人公の初授業に対する感想が書かれている部分である。悪くない滑り出しとなる初授業から、板書によるいたずらが始まり上手くいかなくなる次の授業への伏線にもなっている。

p47 l 5	そのとき、教室の後ろにある黒板に、大きな字で何か書かれていることに気が付いた。 「チクリ」 チョークの腹を使って書いたのであろう、淡い色合いの太々とした字が盛大に躍っていた。 あまり馴染みのない言葉だったが、見た瞬間に何のことを言っているのかわかった。腹の底から熱いものが噴き上がった。おれは唇をぐっと噛んで、生徒たちを睨みつけた。ところが、生徒たちは後ろの黒板のことなど、まるで知らぬ素振りで座っている。(略)そのなかで堀田だけが、真っすぐおれを見つめていた。（略）最後まで無視を貫いて、こんな子供じみた真似にはいちいち応じない姿勢を見せつけなければならない。それでもさすがに腹に据えかねたので、授業を終え教室を出るときに、 「馬鹿なことをするな」 と後ろの黒板を指差して言ってやった。	p40 l 10	翌日、何の気もなく教場へはいると、黒板いっぱいぐらいな大きな字で天麩羅先生とかいてある。おれの顔を見てみんなわあと笑った。おれはばかばかしいから、天麩羅を食っちゃおかしいかと聞いた。すると生徒の一人が、しかし四杯は過ぎるぞな、もし、と言った。四杯食おうがおれの銭でおれが食うのに文句があるもんかと、さっさと講義をすまして控え所へ帰って来た。

描写対象

『鹿男あをによし』　主人公の状況・生徒の板書・主人公の心理・主人公の行動・生徒の行動・(略)・堀田の行動・(略)・主人公の心理・主人公の行動・主人公の談話・主人公の行動

『坊っちゃん』　主人公の行動・生徒の板書・生徒の行動・主人公の心理・主人公の行動・生徒の行動・主人公の行動

叙述機能

『鹿男あをによし』　主人公の状況、心理、行動、生徒の行動の中に異質な堀田の行動を描くことで、キャラクターごとの性格を提示し、堀田の強さを際立たせている。

『坊っちゃん』　主人公と生徒の会話を描くことで、生徒との対立、主人公の性格を提示している。

主人公が初めて板書によるいたずらを受ける場面である。『鹿男あをによし』には、「堀田」という特別な生徒が登場するのに対して、『坊っちゃん』では、特別な生徒は登場しない。また、『鹿男あをによし』の主人公は、板書によるいたずらを受けて授業の最後に生徒に対して声をかけているが、『坊っちゃん』の主人公は気づいてすぐに声をかけているという相

違点があり、それぞれの主人公の性格の違いを際立たせている。

p63 l 5	教室に入ると何よりもまず後ろの黒板に目が向いた。何も書かれていなかった。生徒たちも静かな視線でおれを迎えている。内心ホッとして教壇に足を踏み出そうとしたとき、今度は前の黒板の文字に視線が留まった。 「パンツ三枚千円也」 大きな文字が黒板を制圧していた。 何のことかと一瞬ぼんやりしたが、先週末の駅前での買い物のことを言っていると気づいた途端、思わず息が詰まった。	p40 l 14	十分たって次の教場へ出ると一つ天麩羅四杯なり。ただし笑うべからず。と黒板にかいてある。さっきはべつに腹もたたなかったが今度はしゃくにさわった。冗談も度を過ごせばいたずらだ。

描写対象

『鹿男あをによし』　主人公の行動・主人公の状況・生徒の行動・主人公の心理・主人公の行動・生徒の板書・主人公の心理

『坊っちゃん』　主人公の行動・生徒の板書・主人公の心理

叙述機能

『鹿男あをによし』　板書のいたずらを非常に気にする主人公の行動・心理を描くことによって、主人公の神経衰弱な性格を提示している。

『坊っちゃん』　板書のいたずらを受けた主人公の心理を描くことによって、主人公の性格を提示している。

主人公が二度目の板書のいたずらを受ける場面である。『鹿男あをによし』では、板書を神経質に確認する主人公が描かれ、『坊っちゃん』では、いたずらに非常に腹を立てる主人公が描かれている。同じような場面であるからこそ、主人公の心理、行動の相違点が顕著に表れている。

p66 l 5	鈍い、白けた空気が教室に充満していた。そのとき、何かがふっつりと切れた。おれは教材を脇に持つと、そのまま教室を出た。職員室には戻らず、屋上に向かった。屋上でチョークの粉だらけの手を洗い、コンクリートに大の字になって寝そべった。(略) 授業終了のチャイムが鳴って、職員室に戻った。1－A の生徒がおれを呼びに来たと他の教師から言われるかと思ったが、誰も何も言ってこなかった。どうやら、生徒たちのほうもおれのことを放っておいたらしい。	p41 l 12	それから次の教場へ出たら天麩羅を食うと減らず口が利きたくなるものなりと書いてある。どうも始末におえない。あんまり腹が立ったから、そんな生意気なやつは教えないと言ってすたすた帰ってきてやった。生徒は休みになって喜んだそうだ。こうなると学校より骨董の方がまだましだ。
p66 l 14	翌日、1－A の教室に入った途端、前の黒板に、 「靴下四足千円也」 と大々的に書き込まれているのを認めても、怒りの気持ちはもう湧き起らなかった。 「馬鹿が」 と教室じゅうに聞こえるようにつぶやいて、黒板の文字を消した。		

描写対象

『鹿男あをによし』p66l5　教室の様子・主人公の心理・主人公の行動・(略)・主人公の行動・主人公の心理

P66 l 14　主人公の行動・生徒の板書・主人公の心理・主人公の談話・主人公の行動

『坊っちゃん』　主人公の行動・生徒の板書・主人公の心理・主人公の行動・主人公の心理

叙述機能

『鹿男あをによし』　主人公の行動、教室の様子、主人公の心理が短い文で簡潔に描かれることで、読みやすいリズムを生み出している。また、主人公の行動描写、心理描写から主人公のやるせなさが提示されている。

『坊っちゃん』　主人公の行動、心理を短文で描くことでテンポを作っている。また、主人公の心理、行動を簡潔に示すことでキャラクターの性格を提示している。

主人公が三度目の板書によるいたずらを受ける場面と、いたずらに腹を立てて授業をせずに教室を出る場面である。『鹿男あをによし』の主人公は二度目のいたずらに腹を立て教室を出ており、『坊っちゃん』の主人公は三度目のいたずらに腹を立て教室を出ている。

同じ場面の中で、『鹿男あをによし』の主人公は、「どうやら、生徒のほうもおれのことを放っておいたらしい。」（万城目学『鹿男あをによし』幻冬舎文庫　2010 年 4 月　66 頁 12 - 13 行目）と考えているのに対し、『坊っちゃん』の主人公は、「生徒は休みになって喜んだそうだ。」（夏目漱石『坊っちゃん』角川文庫 1955 年　41 頁 14 - 15 行目）と考えている。場面が同じであるからこそ、『鹿男あをによし』の主人公が自分の行動についてネガティブに考えてしまう一方で、『坊っちゃん』の主人公が生徒に対し呆れの感情を持ち、それほどネガティブには考えていないという考え方の違いが強調される部分となっている。

p67 l 3	翌日の授業では、 「馬鹿と云うな、阿保と云え」 という、何だかよくわからない文句が黒板に躍っていたが、黙って文字を消して、 「堀田――少し話したいことがある。放課後、面談室に来い」 と教室の後ろに向かって大きな声で伝えた。	p42 l 6	今度は生徒にも会わなかったから、だれも知るまいと思って、翌日学校へ行って、一時間目の教場へはいると団子二皿七銭と書いてある。実際おれは二皿食って七銭払った。どうもやっかいなやつらだ。
p73 l 3	面を上げたとき、唐突に正面の黒板の文字が目に入ってきた。 「鹿せんべい、そんなにうまいか」 一瞬、何のことを言ってるのかわからなかった。だが、昨日の帰宅途中のことを言われていると気づいたとき、どきりと身体じゅうが波打った。 「誰だ、後ろの黒板のやつを書いたのは」 おれは思わず声を上げた。もちろん返事はない。おれは床を踏み鳴らして教室の後ろに向かい、黒板の文字を消した。文字を消し終え振り向いたとき、これまでにない行動だったからか、教室の全員が驚いた顔でおれを見つめていた。	p42 l 8	二時間目にもきっと何かあると思うと遊郭の団子うまいうまいと書いてある。あきれかえったやつらだ。

描写対象

『鹿男あをによし』p67　生徒の板書・主人公の行動・主人公の談話

p73　主人公の行動・生徒の板書・主人公の心理・主人公の談話・主人公の行動・主人公の状況・主人公の行動・生徒の行動

『坊っちゃん』p42l6　　主人公の心理・主人公の行動・生徒の板書・主人公の心理
　　p42l8　　主人公の心理・生徒の板書・主人公の心理

叙述機能

『鹿男あをによし』　67 ページの板書に対し、「なんだかよくわからない文句」と描くことにより、生徒は何でも良いから黒板に書いて、主人公に対するいたずらがしたいということを示唆している。また、堀田を呼び出していることから、主人公が、いたずらをしている生徒は堀田だろうと目星をつけていることを提示している。73 ページでは、今までになかったような主人公の行動が描かれることにより、焦っている主人公の心理を提示している。

『坊っちゃん』　主人公の心理、行動、生徒の板書を描くことで、キャラクターの性格を提示するとともに、なぜ見られていない行動が知られているのかというサスペンスを作っている。

主人公が四度目、五度目のいたずらを受ける場面である。『鹿男あをによし』では、主人公が板書によるいたずらを受けるのはこの五回目が最後となっている。『坊っちゃん』では、あと一度受け、六回目が最後となっている。

両小説の主人公が受けた板書によるいたずらについてまとめると、主人公は板書によるいたずらを受けたということ以外にも、いたずらを受ける回数や内容も類似している。内容については、主人公がおそらく生徒に知られていないだろうと推測していた出来事が黒板に書かれる点、買ったものや食べたもの、またその値段が描かれる点が類似している。

場面が類似していることにより、『鹿男あをによし』の主人公がいたずらにより焦りを見せているのに対し、『坊っちゃん』の主人公は生徒に対し呆れの感情を抱いているという主人公の性格の相違点が引き立っている。

p70 l 12	「いちいち気にしすぎなんです。ちょっと神経が細いんじゃないですか？」 「何だって？」 神経という言葉に反応して思わず声が出てしまい、おれは舌打ちした。	p146 l 14	よしわかってもおれのことを天麩羅と言ったんじゃありません、団子と申したのじゃありません、それは先生が神経衰弱だから、ひがんで、そう聞くんだぐらい言うにきまってる。

描写対象

『鹿男あをによし』　堀田の談話・主人公の談話・主人公の行動

『坊っちゃん』　主人公の心理

叙述機能

『鹿男あをによし』　堀田の談話に対する主人公の談話・心理を描くことで、主人公が「神経衰弱」というあだ名を非常に気にしていることを提示している。

『坊っちゃん』　主人公の心理を描くことで、思いこみの激しい主人公の性格を提示している。

主人公が生徒から神経が細い、神経衰弱であると言われる、または言われることを想像する場面である。『鹿男あをによし』の主人公の性格は、『坊っちゃん』のこの場面の「神経衰弱」という言葉を下敷きにしていると考えられる。

p72 l 5	びいと啼く　尻聲悲し　夜乃鹿 これは奈良の鹿を詠んだ芭蕉の句である。(略) 案外、芭蕉もいい加減な男だったに違いないと思うが、この説を人に披露したことはない。	p92 l 11	沖へ行って肥料を釣ったり、ゴルキがロシアの文学者だったり、馴染の芸者が松の木の下に立ったり、古池へ蛙が飛び込んだりするのが精神的娯楽なら、天麩羅を食って団子をのみ込むのも精神的娯楽だ。
p431 l 16	びいと啼く　尻聲悲し　夜乃鹿 ――芭蕉の句が、しみじみと胸に響いた。	p118 l 12	しまいに話をかえて君俳句をやりますかときたから、こいつはたいへんだと思って、俳句はやりません、さようならと、そこそこに帰ってきた。発句は芭蕉か髪結床の親方のやるもんだ。

描写対象

『鹿男あをによし』p72　松尾芭蕉の俳句の引用・俳句の説明・(略)・主人公の心理
p431 松尾芭蕉の俳句の引用・主人公の心理

『坊っちゃん』　p92　主人公の心理
p118 教頭の行動・主人公の心理・主人公の行動・主人公の心理

叙述機能

『鹿男あをによし』　奈良の鹿について詠んでいる芭蕉の句を引用し、それに対する主人公の心理を描くことで、主人公のキャラクターを提示している。また、物語の前半と後半で、同じ句に対する主人公の心理変化を描き、主人公の状況も大きく変わったことが示されている。

『坊っちゃん』　俳句に対する主人公の心理を描くことで、主人公のキャラクターを提示している。

芭蕉の俳句を引用している、または芭蕉という名前が出てきている部分である。『坊っちゃん』では、芭蕉の句が部分的に引用されているのに対し、『鹿男あをによし』では芭蕉の句が二度引用されている。『鹿男あをによし』は芭蕉の句に対する心理が描かれているのに対し、『坊っちゃん』では、俳句をしたり、芸者と仲良くしたりしているという教頭に対する心理が描かれている。芭蕉の句の場面で心理描写があるということは類似しているが、思いを抱く対象が大きく異なっている。

p74 l 15	授業が終わると同時に、おれはトイレに駆けこんだ。便座に座っている間も、誰かに監視されているような気がして、天井とドアの隙間を神経質に見上げてしまい、非常にいけないと思った。	p43 l 13	泳ぐのは断念したが、学校へ出てみると、例の通り黒板に湯の中で泳ぐべからずと書いてあるには驚いた。何だか生徒全体がおれ一人を探偵しているように思われた。くさくさした。

描写対象

『鹿男あをによし』　主人公の行動・主人公の心理・主人公の行動・主人公の心理

『坊っちゃん』　主人公の行動・生徒の板書・主人公の心理

叙述機能

『鹿男あをによし』　主人公の行動・心理を描くことで主人公のキャラクターを読者に提示している。

『坊っちゃん』　生徒の板書の対する主人公の心理を描くことで、主人公のキャラクターを読者に提示している。

主人公が、板書によるいたずらを受けて、誰かに監視されているのではないかと疑う場面である。『鹿男あをによし』の主人公が神経質になるのに対し、『坊っちゃん』の主人公はいらだちを見せている部分が相違点としてあげられる。

p84 l 14	それからしばらく他愛のない話を続けていたが、リチャードが突然、 「先生はゴルフをなさいますか？」 と訊ねてきた。 いえ、経験ありませんと首を振ると、じゃあ、今度打ちっ放しにでも行きませんかとやけに誠実な口調で誘ってきた。 （略） 「ゴルフクラブなんて握ったこともありません。いくら振ってもあんな小さな球になんか当たらないと思います」 「ハハハ、最初はだれでもそうですよ。でも、先生は見たところ、身体も頑丈そうだし、重心もしっかりしていそうだから、素質はあるんじゃないですか」 何を根拠にそう言うのかは不明だが、リチャードはどこまでも誠実におれを打ちっ放しに誘ってくる。	p58 l 9	君釣に行きませんかと赤シャツがおれに聞いた。赤シャツは気味のわるいように優しい声を出す男である。(略) おれはそうですなあと少し進まない返事をしたら、君釣をしたことがありますかと失敬なことを聞く。(略) それから神楽坂の毘沙門の縁日で八寸ばかりの鯉を針で引っかけて、しめたと思ったら、ぽちゃりと落としてしまったがこれは今考えても惜しいと言ったら、赤シャツは顎を前の方へ突き出してホホホホと笑った。なにもそう気取って笑わなくっても、よさそうなものだ。「それじゃ、まだ釣の味はわからんですな。お望みならちと伝授しましょう」とすこぶる得意である。

描写対象

『鹿男あをによし』　主人公の状況・教頭の談話・主人公の行動・教頭の行動・(略)・主人公の談話・教頭の談話・主人公の心理

『坊っちゃん』　教頭の行動・主人公の心理・(略)・主人公の行動・教頭の行動・主人公の心理・(略)・主人公の行動・教頭の行動・主人公の心理・教頭の談話・主人公の心理

叙述機能

『鹿男あをによし』　主人公と教頭の行動、談話をベースに描くことで、主人公と教頭との関係性や、主人公が教頭に抱く印象を提示している。また、打ちっ放しに行くことに乗り気ではない主人公を積極的に誘う教頭の行動から、これから主人公と何かがある伏線となっている。

『坊っちゃん』　主人公と教頭の話の中に細かく主人公の心理描写を挟むことにより、主人公が教頭に対して抱く印象を提示している。

それぞれの小説に出てくる教頭が、それぞれの主人公を趣味のゴルフ、釣りに誘う場面である。似た場面であるので、『鹿男あをによし』の主人公が教頭に対し「誠実」という印象を抱いているのに対し、『坊っちゃん』の主人公は教頭に対し「気味の悪い声」、「失

敬なこと」、「気取って」、「すこぶる得意」という心理を抱いており、良くないイメージを持っているという相違点が強調される。

p94 l6	久しぶりに広い風呂で手足を伸ばしたら、これが実に気持ちよかった。昼時だからか客も少なく、調子に乗って誰もいない湯船で泳いでいたら、後から入ってきたリチャードから行儀が悪いと咎められ、たいそう恥ずかしかった。	p43 l8	おれは人のいないのを見すましては十五畳の湯壺を泳ぎまわって喜んでいた。ところがある日三階から威勢よく下りて今日も泳げるかなとざくろ口をのぞいて見ると、大きな札へ黒々と湯の中で泳ぐべからずとかいて貼りつけてある。

描写対象

『鹿男あをによし』　主人公の行動・主人公の心理・主人公の状況・主人公の行動・教頭の行動・主人公の心理

『坊っちゃん』　主人公の行動・主人公の心理・風呂屋の張り紙

叙述機能

『鹿男あをによし』　主人公の行動、心理を描くことで、キャラクターの性格を提示している。

『坊っちゃん』　主人公の行動、心理を描くことで、キャラクターの性格を提示するとともに、風呂屋の張り紙によって、なぜそんな張り紙が張られたのかというサスペンスを作っている。

主人公がお風呂で泳ぎ、注意されるという場面である。『鹿男あをによし』の主人公が教頭に注意を受けるのに対して、『坊っちゃん』の主人公は、張り紙によって注意を受けている。また、『鹿男あをによし』では奈良健康ランドが、『坊っちゃん』は道後温泉が舞台となっており、実際に存在する場所が出てきているという点が共通している。道後温泉が日本三古泉に選ばれている本格的な温泉であるのに対し、奈良健康ランドはスーパー銭湯であり、万城目学のユーモアがあらわれている部分にもなっている。

p129 l 2	やっこさん、やけにうれしそうである。	p118 l 6	今より重大な責任といえば、数学の主任だろうが、主任は山嵐だから、やっこさんなかなか辞職する気づかいはない。
p360 l 10	これは放課後まで無理だなと弁当を食べ終え、藤原君と並んで不味いかりんとうを齧っていると、やっこさん、何やら机の上に写真を並べ始めた。	p131 l 15	おれが増給を断わったと話したら、大将大きに喜んでさすが江戸っ子だ、えらいとほめてくれた。
p361 l 10	やっぱりフラッシュは駄目だったかあと落ち込む藤原君に、デジカメだったらその場で失敗したってわかったのにねとささやくと、やっぱりデジカメを買おうかなとやっこさん、急に弱気になってつぶやいた。	p132 l 14	すると大将二の腕へ力瘤を入れて、ちょっとつかんでみろと言うから、指の先でもんでみたら、なんのことはない湯屋にある軽石のようなものだ。

描写対象

『鹿男あをによし』p129　主人公の心理
　　p360　主人公の心理・主人公の行動・藤原君の行動
　　p361　藤原君の行動・主人公の行動・藤原君の行動
『坊っちゃん』　p118　主人公の心理
　　p131　主人公の行動・堀田の行動・主人公の心理
　　p132　堀田の行動・主人公の行動・主人公の心理

叙述機能

『鹿男あをによし』　主人公視点で描かれる物語の中で、藤原君のことを「やっこさん」と描くことで、藤原君の能天気なキャラクターを提示するとともに、主人公が藤原君に抱いている印象を表している。

『坊っちゃん』　主人公視点で描かれる物語の中で、堀田のことを「大将」と描くことで、教頭への報復をする上で堀田についていくつもりであることを提示している。また、「やっこさん」、「大将」と描くことで主人公が堀田に対して親しみを感じていることを表している。

『鹿男あをによし』で、主人公と最も仲の良い同僚として登場する藤原君が「やっこさん」と描かれ、『坊っちゃん』で主人公と最も仲の良い同僚として登場する堀田が「やっこさん」、「大将」と描かれる場面である。「やっこさん」、「大将」と呼び方が異なることもあるものの、叙述機能が類似している。また、この記述によって両小説ともにテンポの良い文章となっている。

p130 l5	「今でも、僕は腑に落ちないんですよ。先生のクラスで日本史を教えているから、僕も堀田は知っています。堀田はあんなふうにクラスを扇動して、先生を攻撃するような子じゃないですよ」 「あ。やっぱりあれって堀田が仕組んだの？」 「そうらしいですよ」	p67 l10	おれのことは、おそかれはやかれ、おれ一人でかたづけてみせるから、さしつかえはないが、また例の堀田がとか扇動してとかいう文句が気にかかる。堀田がおれを扇動して騒動を大きくしたという意味なのか、あるいは堀田が生徒を扇動しておれをいじめたというのか方角がわからない。
		p74 l2	しかし、あの山嵐が生徒を扇動するなんて、いたずらをしそうもないがな。

描写対象

『鹿男あをによし』　藤原君の談話・主人公の談話・藤原君の談話

『坊っちゃん』p67　主人公の心理

　　p74　主人公の心理

叙述機能

『鹿男あをによし』　主人公と藤原君の談話を描くことで、いたずらの犯人を示している。また、主人公以外に対する堀田のキャラクターを提示している。

『坊っちゃん』　堀田が扇動しているという噂に対する主人公の心理を繰り返し描くことで、主人公の堀田に対する思いが提示され、堀田のことを気にしているということが強調されている。

「堀田」が主人公に対するいたずらを「扇動」しているかもしれないということを主人公が知る部分である。両小説共に「扇動」という言葉を使っているところが特徴的である。

この場面のように、『鹿男あをによし』では状況描写や行動描写、談話描写により物語が進んでいくことが多いのに対し、『坊っちゃん』では、主人公の心理描写が多くみられる。

p185 l6	おれはもう一度頭を下げた。足元の草の葉に、小さなバッタがじっとうずくまっていた。	p48 l4	さっそく起き上がって、毛布をぱっと後ろへほうると、蒲団の中から、バッタが五、六十飛び出した。正体の知れない時は多少気味がわるかったが、バッタと相場がきまってみたら急に腹がたった。

描写対象
『鹿男あをによし』　主人公の行動・主人公の状況
『坊っちゃん』　主人公の行動・主人公の心理

叙述機能
『鹿男あをによし』　主人公の行動の後、主人公の視覚的な情報を描くことにより、主人公が長い間頭を下げており、懇願していることを提示している。
『坊っちゃん』　主人公の行動、心理を描くことで、キャラクターの性格を提示している。

両小説ともに、「バッタ」が出てくる場面である。万城目学が『鹿男あをによし』をかくために平城京跡を訪れた際の出来事として自身のエッセイに、

線路を渡って北に向かうと、さらに手に負えないほどの原っぱが広がっていた。
草をかき分けて進むたびに、バッタがあちこちから飛び出してきた。
万城目学『ザ・万字固め』文春文庫 2016 年 2 月　163 - 164 頁

とかいている。『坊っちゃん』において、バッタはキーアイテムの一つとして出てきていることから、平城京跡で見たバッタと『坊っちゃん』のバッタを重ね、小説内に登場させたと考えられる。

p196 l9	おれは物理の教師である。自然科学の真理を探究する学びの徒である。地震は地下のプレートの移動による地層のひずみが原因となって起こる。決してなまずが暴れて起きるものではない。だが、おれの完璧な正論も、実際にしゃべる鹿を目の前にして、悲しいほどに空しい。	p65 l2	おれのような数学の教師にゴルキだか車力だか見当がつくものか、少しは遠慮するがいい。言うならフランクリンの自伝だとかプッシング・ツー・ゼ・フロントだとか、おれでも知ってる名を使うがいい。

描写対象
『鹿男あをによし』　主人公の心理
『坊っちゃん』　主人公の心理

叙述機能
『鹿男あをによし』　主人公の心理を描くことで、キャラクターの性格を提示している。
『坊っちゃん』　主人公の心理を描くことで、キャラクターの性格を提示している。

両者ともに、理系の教師であると心の中で主張している場面である。両小説ともに、主人公は最終的に教頭と対立することになるが、主人公が理系で教頭が文系であるという構図が共通している。

p250 l 4	「そうそう、昨日、伊豆から電話があってね。いよいよ向こうは地震がひどいらしい。こっちの新聞には載らないけど、ほとんど毎日一度はぐらっとくるとかで、真剣に奈良に戻ろうかと話していた」	p161 l 6	喧嘩の出ているのは驚かないのだが、中学の教師堀田某と、近ごろ東京から赴任したなまいきなる某とが、順良なる生徒を使そうしてこの騒動を喚起せるのみならず、両人は現場にあって生徒を指揮したるうえ、みだりに師範生に向かって暴行をほしいままにしたりと書いて、次にこんな意見が付記してある。
p419 l 5	うるさいよと睨み返すと、何だか今日の先生はおっかないと藤原君はまた首をすくめた。もうおれは先生じゃないよと言うと、いえ今日まで十月だかられっきとした先生ですよとやけに強気な表情で藤原君は断言した。	p162 l 8	それに近ごろ東京から赴任したなまいきな某とはなんだ。天下に某という名前の人があるか。考えてみろ。これでもれっきとした姓もあり名もあるんだ。

描写対象

『鹿男あをによし』p250　重さんの談話
　　p419　主人公の行動・藤原君の行動・主人公の行動・藤原君の行動
『坊っちゃん』p161　主人公の心理・新聞の記事
　　p162　主人公の心理

叙述機能

『鹿男あをによし』p250　重さんの談話によって東日本の状況を描くことで、主人公に焦りを持たせる文になっている。
　　p419　主人公と藤原君の会話を描くことで、主人公と藤原君との関係性を提示している。
『坊っちゃん』　新聞の記事と主人公の心理を描くことで、新聞に対して激怒する主人公の性格を提示している。

主人公の名前が登場しそうで登場しない場面と、新聞が出てくる場面である。名前を登場させるのが自然な場面で登場させないことで、両小説ともに主人公に意図的に名前を付けていないことが強調される。

また、『鹿男あをによし』の時代では一家に一台テレビがあるのが当たり前であるが、テレビではなく新聞の情報を描くことでより『坊っちゃん』を意識させるものになっている。

p332 l 15	「学校を辞めさせてください」 一瞬、おれは呆気に取られ、まじまじと堀田の顔を見つめた。 「ま、待て、ちょっと待て」 「今すぐ学校を辞めさせてください。いえ、学校は勝手に辞めます。だから、邪魔をしないでください。理由も一切訊かないでください。それが私のお願いです。」	p168 l 4	それから三日ばかりして、ある日の午後、山嵐が憤然とやって来て、いよいよ時機が来た、おれは例の計画を断行するつもりだと言うから、そうかそれじゃおれもやろうと、即座に一味徒党に加盟した。ところが山嵐が、君はよすほうがよかろうと首を傾けた。なぜと聞くと君は校長に呼ばれて辞表を出せと言われたかと尋ねるから、いや言われない。君は？ときき返すと、きょう校長室で、まことに気の毒だけれども、事情やむをえんから処決してくれと言われたとのことだ。

描写対象

『鹿男あをによし』　堀田の談話・主人公の心理・主人公の行動・主人公の談話・堀田の談話

『坊っちゃん』　山嵐の行動・主人公の行動・山嵐の行動・主人公の行動・堀田の行動・主人公の行動・堀田の行動

叙述機能

『鹿男あをによし』　堀田の言葉に対する主人公の心理を描くことで、主人公のキャラクターが提示されている。また、堀田のセリフから、堀田の真っすぐな性格が提示されている。

『坊っちゃん』　主人公と堀田が話し合う行動描写で話が進むことによって、堀田の主人公に対する心理が提示されている。

初めは仲違いしていたものの、主人公と仲良くなった堀田が学校を辞める、辞めたいということを主人公に報告する場面である。両小説ともに主人公と堀田の会話で話が進むものの、『鹿男あをによし』では会話がかぎかっこで示され談話描写になっているのに対して、『坊っちゃん』ではかぎかっこはあらわされず、行動描写で描かれている。

p416 l7	放課後、机の私物をまとめ、他の教師に挨拶をして回った。最後にリチャードのところへ行くと、私もとても残念です、どうかお身体を大切にしてください、今後のご活躍を心よりお祈りしておりますと実に情実あふれる表情とともに言葉を並べた。最後の最後になって、ばあさんがリチャードには気をつけろと言っていた意味をしみじみと嚙みしめた。年寄りの言葉は聞くもんだと大いに反省した。	p135 l13	ことごとく送別の辞を述べたが、三人とも申し合わせたようにうらなり君の、良教師で好人物なことを吹聴して、今回去られるのはまことに残念である、学校としてのみならず、個人として大いに惜しむところであるが、御一身上の御都合で、せつに転任を御希望になったのだからいたしかたがないという意味を述べた。

描写対象
『鹿男あをによし』　主人公の行動・教頭の行動・主人公の心理
『坊っちゃん』　送別会の幹事と校長と教頭の行動

叙述機能
『鹿男あをによし』　教頭の誠実そうな行動に対する主人公の心理を描くことで教頭と主人公のキャラクターの性格を提示している。
『坊っちゃん』　送別会の幹事と校長と教頭の送別の辞を描くことで、キャラクターの性格を提示している。

『鹿男あをによし』では、教頭が原因で約束より早く奈良を去ることが決まった主人公に対し、教頭が別れの言葉を述べる場面である。『坊っちゃん』では、教頭が原因で九州の学校に転任することが決まった古賀に対して教頭ら三人が送別の辞を述べる場面である。両小説ともに主人公と教頭が敵対している点が一致している。また、『鹿男あをによし』では奈良県を去る主人公に対して、『坊っちゃん』では愛媛県を去る古賀に対して、敵対する教頭が誠実そうな言葉をかける点が類似している。

p417 l1	あっかんべえをしてやると、やっこさん、サウナのときよりもさらに顔を真っ赤にしていた。	p136 l8	おれは返電として、人さし指でべっかんこうをして見せた。

描写対象
『鹿男あをによし』　主人公の行動・教頭の行動
『坊っちゃん』　主人公の行動

叙述機能
『鹿男あをによし』　主人公の行動に対する教頭の反応を描くことで、主人公のキャラクターと教頭の性格を提示している。
『坊っちゃん』　主人公の行動を描くことでキャラクターの性格を提示している。

主人公があっかんべえをして見せる場面である。『鹿男あをによし』では、敵対する教頭に向かって行っているのに対し、『坊っちゃん』ではすでに仲良くなっている堀田に向かって行っている。前者は教頭をからかう意味で、後者は堀田のことを応援する意味で行っている。あっかんべえに込められる意味は違うものの、両小説において、印象的な場面になっている。

p417 l 4	初めて奈良にやってきた日、重さんが窓から若草山を指差して、新年明けて行われる山焼きを毎年ここから見るんだ、花火も一緒に上がるんだよと教えてくれた。名に聞く若草山焼きであるし、それを見てから大学に戻ろうかな、などと思っていたのに、ずいぶん早く帰る羽目になったもんだ。	p150 l 13	婆さんに聞いてみると、すこぶる水気の多い、うまい蜜柑だそうだ。いまに熟れたら、たんと召し上がれと言ったから、毎日少しずつ食ってやろう。もう三週間もしたら、じゅうぶん食えるだろう。まさか三週間内にここを去ることもなかろう。

描写対象
『鹿男あをによし』　主人公の心理
『坊っちゃん』　主人公の心理

叙述機能
『鹿男あをによし』　主人公の心理を描くことで、考えていたよりも早く奈良を去ることになったことを提示している。
『坊っちゃん』　主人公が蜜柑を食べることを楽しみにしている心理を描くことで、しばらく愛媛を去るつもりがないことを提示している。

両小説ともに、主人公は予定よりも早く教師を辞めることになったことを示す場面である。『鹿男あをによし』では、奈良の伝統行事である若草山の山焼きを、『坊っちゃん』では愛媛県の名物である蜜柑を食べるのを楽しみにしていたところが描かれている。地域の伝統行事や名物を登場させることで、どちらも、「奈良県」、「愛媛県」であることを活かした物語展開になっていると言える。

p427 l 15	「そいつは先生――神経衰弱だよ」 は？　と間抜けな声を上げたおれに鹿は告げた。糞が大人しい？そりゃあ便秘だろう、油っぽいものが食べられない？そりゃあ胃もたれだろう、味覚がおかしい？そりゃあ、自律神経の具合が悪いんだろう、さっさと病院に行って薬をもらうんだね――。（略）そうなのか、おれは神経衰弱なだけだったのか――何だか妙に明るい気分でつぶやいた。	p175 l 14	「増給がいやだの辞表が出したいのって、ありゃどうしても神経に異状があるに相違ない」おれは窓をあけて、二階から飛び下りて、思うさまぶちのめしてやろうと思ったが、やっとのことでしんぼうした。

描写対象

『鹿男あをによし』　鹿の談話・主人公の行動・鹿の行動・(略)・主人公の行動

『坊っちゃん』　教頭の談話・主人公の心理

叙述機能

『鹿男あをによし』　鹿の談話を受けて非常に驚く主人公の行動を描くことで、これまで自分が神経衰弱とは全く思っていなかったことを提示している。また、今まで非常に嫌悪感を抱いていた神経衰弱という言葉に安心している場面を描くことで、神経衰弱であること以上に大きな心配事があることを提示している。

『坊っちゃん』　教頭の談話に対する主人公の心理を描くことで、主人公のキャラクターの性格を提示している。また、少年時代は友人にからかわれて二階から飛び降りていたが、今回は辛抱しており、主人公の成長があらわされている。

両小説ともに主人公が、神経衰弱であること、神経に異状があることを他人から言われる場面である。同じ神経衰弱であっても、『鹿男あをによし』の主人公は神経衰弱であることがわかって安堵している一方で、『坊っちゃん』の主人公はいら立ちを見せている。同じ場面で違う心理を見せることでそれぞれの性格の相違点が強調される場面となっている。

p435 l 5	部屋の窓を閉めて、一階に下りた。玄関で靴を履いていると、ばあさんがしくしく泣きだした。ほら、泣かないって約束だったでしょうとおれが笑うと、だって出てくるものは仕方ないじゃないかとばあさんは開き直って、タオルを目頭に当てた。何時の汽車に乗るんだい？と訊かれ、京都を十一時に出る新幹線に乗るつもりですと答えた。	p21 l 15	車を並べて停車場へ着いて、プラットフォームの上へ出た時、車へ乗り込んだおれの顔をじっと見て「もうお別れになるかもしれません。ずいぶんごきげんよう」と小さな声で言った。目に涙がいっぱいたまっている。おれは泣かなかった。しかしもう少しで泣く所であった。汽車がよっぽど動き出してから、もう大丈夫だろうと思って、窓から首を出して、振り向いたら、やっぱり立っていた。なんだかたいへん小さく見えた。
p435 l 11	四つ辻のところで振り返ると、家の前でばあさんが一生懸命手を振っていた。急に視界が滲むのを感じながら、おれも手を振って、ばあさんに別れを告げた。		

描写対象

『鹿男あをによし』p435 l 5　主人公の行動・ばあさんの行動・主人公の行動・ばあさんの行動・主人公の行動

p435 l 11　主人公の行動・ばあさんの行動・主人公の行動

『坊っちゃん』　主人公の行動・清の行動・清の談話・清の行動・主人公の行動・主人公の心理・主人公の行動・清の行動・主人公の心理

叙述機能

『鹿男あをによし』　主人公とばあさんの行動描写のみで進むことにより、読み手にそれぞれのキャラクターの心理を想像させる描き方となっている。

『坊っちゃん』　清の行動に対する主人公の心理を描くことで主人公と清の関係性を提示し、読者を感動させるつくりとなっている。

『鹿男あをによし』では奈良県でお世話になった下宿のばあさんと主人公の、『坊っちゃん』では主人公のことを非常に愛していた清と主人公の別れの場面である。歳を取った女性との別れのシーンであることが一致している。ばあさんと清はそれぞれ泣いているが、主人公は泣きそうになりながらも泣いていないという点も類似している。また、『鹿男あをによし』の主人公が乗るのは汽車ではなく新幹線であるが、「汽車」という言葉を出すことで『坊っちゃん』を意識させる描き方となっている。

主人公とばあさん、主人公と清がそれぞれ別れた後で主人公が振り返っている点、振り返ってもばあさん、清共にまだ主人公を見ている点も類似している。

ここまで、『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』の共通する場面の描写対象・叙述機能を見ると、『鹿男あをによし』では、主人公の性格が主人公の行動描写や談話描写であらわされることが多いのに対し、『坊っちゃん』では、主人公の性格が主人公の心理描写であらわされることが多いことがわかる。前者では、登場人物の行動描写から主人公の心理を読み取らせようとする場面が多いのに対して、後者は行動描写や状況描写から主人公の心理がはっきりと示されている場面が多い。

また、『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』で一致する場面、類似する場面の中で、主人公が抱く心理の違いを見ることで、それぞれの主人公の性格、考え方の違いがより浮き彫りになっている。特に主人公が焦りや不安などマイナスの感情を持った時は、『鹿男あをによし』の主人公がうなだれたり、焦りがそのまま行動に出てしまったりする一方で、『坊っちゃん』の主人公は他人に対しての怒りや呆れの感情を持つという点が大きく異なっている。

さらに、『鹿男あをによし』が読者に『坊っちゃん』を意識させるように、「箱根」、「神経衰弱」、「芭蕉」、「バッタ」、「堀田が扇動」、「手紙」、「新聞」などのキーアイテム、キーワードが意図的に登場していることがわかる。このことで、『鹿男あをによし』独自の物語を楽しむのに加えて、『坊っちゃん』との類比、対比によりもう一度『鹿男あをによし』を楽しむことができる仕掛けになっている。

第五章　『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』の構成比較

この章では、『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』の構成について分析する。小説内の大きな事件だけを取り上げ、「事件前」、「事件」、「事件後」を分析し、事件によりどのように変化したのかを見ていく。

両小説の構成において類似点が見られる部分に同じ数字を振り、どのような類似点が見られるか考えていく。

『鹿男あをによし』の構成

事件前	事件	事件後
	①はじめに（主人公が少年期の話）	
大学院で研究員として働く。	②大学院の教授から教師として働かないかと提案される。	奈良県の女子高で教師をすることになる。
初授業・生徒の自己紹介	③堀田との出会い、堀田から嘘をつかれる。	生徒と冷戦状態になる。
授業の出だしは悪くない。	④板書のいたずらを受ける。	堀田がいたずらを主導しているのではないかと考える。 （主人公 vs 堀田の構図）
主人公は自分のことを神経衰弱ではないと思っている。	鹿から話しかけられる。	主人公は自分が完全なる神経衰弱であると落ち込む。
下宿のばあさんから「教頭には気を付けた方がいい」と忠告を受ける。	⑤教頭とゴルフ、温泉に行く。 剣道部の顧問をしてほしいと持ちかけられる。	剣道部の顧問になる。 教頭が悪い人だとは考えていない。
⑥堀田がいたずらを扇動していたことを知る。 大和杯の打ち合わせで「サンカク」を受け取るよう鹿から指示される。	⑦大和杯の打ち合わせとして京都へ向かう。そこでは「サンカク」を渡されることはなかった。	鹿が話しているのは全部自分の妄想だ、自分は神経衰弱だと思い込む。
鹿の話は自分の妄想だと思っている。	鹿から「印」をつけられ、主人公の顔が日に日に鹿に近づいていく。	鹿の話が妄想でなかったことに気付く。

大和杯の優勝校に「サンカク」が贈られると知るが、大和杯で勝つのは無理だと思っている。	藤原君と小旅行をし、大和杯のルール変更ができると教えてもらう。	大和杯への希望が生まれる。
堀田とは臨戦状態であるが、「サンカク」を手にするためともに大和杯を戦う。	⑧大和杯が行われ、堀田の活躍により優勝する。	⑨堀田との間に絆が生まれる。 しかし、大和杯で得られた「サンカク」は本物の「サンカク」ではなかった。
堀田が学校を休みがちになる。	⑩主人公の下宿先に堀田が現れ、学校を辞めると言い出す。 ここで堀田の顔も鹿になっていることに気がつく。	⑪堀田とは仲間であり、教頭が主人公の邪魔をしていることに気がつく。 （主人公 vs 教頭の構図）
「サンカク」を教頭から渡される。	「鎮め」の儀式	主人公と鹿と堀田との絆が深まる。
教頭との関係が良くなくなる。	⑫早めに教師を辞めることになる。	教頭が主人公の退任を急がせるように指示していたことがわかる。
主人公の顔は鹿になってしまったまま、出身地へ帰ることになる。	⑬新幹線が発車する直前に堀田が会いにくる。そこで堀田にキスされる。	人間の顔に戻る。

『坊っちゃん』の構成

事件前	事件	事件後
	①主人公が少年時代の話（清との固い絆）	
物理学校を卒業する。	②物理学校の校長から教師として働かないかと提案される。	愛媛県の中学で教師をすることになり、清と離れる。
愛媛県につく。	③堀田や他の教師人と出会う。 堀田に氷水をおごってもらう。	堀田は悪いやつではなさそうだと思う。
授業の出だしは悪くない。	④板書のいたずらを受ける。	生徒と冷戦状態になる。
	宿直で生徒から嫌がらせを受ける。	さらに生徒との溝が深まる。
	⑤教頭から釣りに誘われ、教頭と吉川とともに釣りに出かける。	⑥堀田が生徒を扇動しているという噂を耳にする。
下宿の主人が骨董品を売りつけようと話をしてくる。	堀田に下宿を出るように頼まれる。	堀田との溝が深まる。 （主人公 vs 堀田の構図）
堀田との溝は埋まらないままである。	主人公の宿直の態度、生徒との関係についての職員会議が開かれる。	上手く話すことのできない主人公に変わり、堀田が生徒に主人公へ謝らせるよう話してくれる。
	堀田から紹介された下宿を出て、古賀に紹介してもらった下宿に入ることにする。	堀田が悪いやつなのか、教頭が悪いやつなのかわからず、考えている。
	温泉で古賀、教頭、マドンナに出会う。その後主人公は教頭とマドンナが二人で歩いているところを目撃する。	教頭が悪いのではないかと考え始める。
教頭から呼び出される。	主人公が教えるようになって生徒の成績が上がったから給料を上げると言われる。しかし古賀が転任すると聞き、増給を断る。	教頭は悪いやつだと確信する。 （主人公 vs 教頭の構図）
堀田が謝ってきて、主人公と仲直りする。	⑦古賀の送別会が行われる。	⑨堀田との絆が深まる。

教頭の弟が呼びに来たので祝勝会の余興を見に行く。	⑧祝勝会の余興で起こった喧嘩の止めに入る。	堀田と主人公が喧嘩を指揮したという誤りの記事が新聞に載る。
	⑩堀田が学校を辞めさせられることになる。	⑪教頭と吉川に報復するため、主人公と堀田が結束する。 （主人公・堀田 vs 教頭・吉川の構図）
教頭と吉川に対する報復が成功する。	⑫⑬堀田とともに辞職を決意し、東京に帰る。	清と再会する。

『鹿男あをによし』、『坊っちゃん』ともに、①のように少年時代の話から始まっている。『坊っちゃん』では、一章目として少年時代の出来事が描かれているのに対して、『鹿男あをによし』では、「はじめに」として少年時代の話が描かれている。主人公が不思議な話を経験したことがないという、これから起こる不思議な話の伏線になっているのに加えて、『坊っちゃん』の構成を意識した書き出しになっているとも考えられる。

次に、②についてである。教師として働く気が全くなかった両小説の主人公に対して、『鹿男あをによし』では教授が、『坊っちゃん』では物理学校の校長が主人公に対して教師として働かないかと提案する場面が描かれる。両小説ともに、今までのように故郷で働いていれば起こり得ないことが起こる、物語を展開させる大きなカギとなる場面となっている。

両主人公ともにそれぞれ奈良県、愛媛県で教師をすることになる。③はそこでの重要人物となる堀田との出会いである。『鹿男あをによし』の堀田は生徒であり、『坊っちゃん』の堀田は数学の主任である。キャラクター設定は大きく異なるものの、両小説ともに主人公と喧嘩し、険悪になるものの物語の終盤では絆が芽生える人物となっている。そして④で板書によるいたずらを受ける。

⑤では、④のようにいたずらをされるなど、生徒と上手くいっていない主人公に対して、教頭が趣味に誘うという場面である。『鹿男あをによし』、『坊っちゃん』ともに最終的には主人公と敵対する関係になる教頭であるが、両小説ともにここで主人公を趣味に誘い、主人公との関係を作っておく構成になっている。

次に⑥で、堀田が生徒によるいたずらを扇動しているのではないかという噂を耳にする場面である。⑤によって主人公と教頭にある程度関係ができた後で、堀田がいたずらを扇動しているという噂を耳にする流れにすることで、この後の物語展開をより複雑にする伏線となっている。

ここまでの構成については『鹿男あをによし』、『坊っちゃん』ともに概ね類似している。ここからそれぞれの小説ごとの物語が展開され、後半に再度、構成が類似してくる部分がある。

⑦は、『鹿男あをによし』では大和杯の打ち合わせとして親睦会が、『坊っちゃん』では古賀の送別会が開かれる場面である。両小説ともに教師の飲み会の様子が描かれる場面となっている。⑧は、『鹿男あをによし』では大和杯と呼ばれる奈良女学館、京都女学館、大阪

女学館三校の交流戦が行われる場面である。『坊っちゃん』では、主人公が勤めている中学校の生徒と近くの師範学校の生徒との間で喧嘩が起こり、主人公が巻き込まれる場面である。両小説ともに他校との争いの様子が描かれる場面となっている。

このように、ともに様々な事件を乗り越え主人公と堀田の絆が深まるのが⑨であり、絆が深まった堀田が学校を辞める、辞めさせられるということを聞くのが⑩である。

『鹿男あをによし』では主人公と堀田が結束し、教頭が敵であったことに気がつく場面、『坊っちゃん』では、卑劣な悪事ばかり働く教頭に一矢報いようとする場面が⑪である。ここで教頭と関係が悪くなった両小説の主人公は、⑫のように、主人公自身が考えていたよりも早くそれぞれ奈良県、愛媛県を去ることになる。

そして最後に、奈良県、愛媛県での重要人物であった堀田と別れるのが⑬という構成になっている。

大きな構成として、初めに主人公の少年期が描かれ、見知らぬ土地で教師となり、堀田と出会い絆が芽生え、堀田とともに教頭と戦い、堀田との別れとともに土地を去るという部分が一致している。

『鹿男あをによし』はこの構成に鹿や鹿島大明神、「サンカク」などの歴史と神話が混ぜられており、構成が類似している『坊っちゃん』とは違う「万城目ワールド」が展開されている。『坊っちゃん』は、その構成に清との愛情、絆が混ぜられたものとなっている。

第六章　まとめと今後の課題

ここまで、『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』の登場人物分析、叙述分析、構成分析を行ってきて、登場人物、叙述、構成全てにおいて『鹿男あをによし』内に『坊っちゃん』のパスティーシュ部分が多く存在することがわかった。また、それは万城目学が意図的にわかりやすく、読者に『坊っちゃん』を意識させるために組み込んでいると考えられる。同じ名前の登場人物を登場させたり、大きな構成を下敷きにしたりと物語の軸の部分をパスティーシュすることで「現代版坊っちゃん」を作り上げたことがわかった。

登場人物を比較したことで、『鹿男あをによし』の主人公と、『坊っちゃん』の主人公、『鹿男あをによし』の教頭と『坊っちゃん』の教頭、『鹿男あをによし』の藤原君と『坊っちゃん』の古賀と、類似している登場人物の文理が一致していることがわかった。一般的に、文系の人間と理系の人間ではそれぞれ違ったイメージを持たれていることが多いと考えられるので、キャラクターのイメージも似せるように文理を一致させたと考えられる。

また、『鹿男あをによし』の奈良編、『坊っちゃん』の愛媛編において、主人公、堀田、教頭の次の重要人物である『鹿男あをによし』の藤原君、『坊っちゃん』の古賀のキャラクター設定がそれぞれの物語の大きな相違点となっていることがわかった。他の登場人物は類似点が多いにもかかわらず、藤原君と古賀については大きく異なる設定となっており、藤原君は能天気なキャラクターとして描かれ、古賀は君子で真面目なキャラクターとして描かれている。この二人のキャラクター設定の違いがそのまま『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』の作品のイメージの違いとして表れているのではないかと考えられる。

叙述分析においては、両小説ともに短く簡素な文が多く、テンポよく読みやすい文章となっていることがわかった。

類似する場面を比較することで、『鹿男あをによし』の主人公と『坊っちゃん』の主人公の考え方が異なるということがわかった。前者はネガティブに考えることが多く、何か事件が起こった時には自分が悪かったと自己を責めるのに対して、後者は何か事件が起こった時に、主に他人の悪い点を責めるという大きな相違点があった。また、前者は行動描写が多く用いられ、行動や状況から登場人物の心理を想像させるが、後者は心理描写が多く、主人公の個性的でユーモアのある愚痴をそのまま読者に伝える文章になっている。

最後に構成比較を行ったことで、『鹿男あをによし』と『坊っちゃん』の大きな流れが類似していることがわかった。構成が類似していながらもそれぞれの個性が物語中盤で表れており、『坊っちゃん』を知らずに『鹿男あをによし』を読んでも楽しく、『坊っちゃん』を読んでから読むとさらに楽しく『鹿男あをによし』に親しめるようになっていることがわかった。

『鹿男あをによし』が好きで、本作品と『坊っちゃん』について分析、比較し考えていくうちに万城目学が持つ『坊っちゃん』に対する強い愛を感じた。『鹿男あをによし』を通じて、1906 年に『ホトトギス』第九巻第七号で発表されてから 100 年以上の時が経っても我々の心を魅了する『坊っちゃん』の素晴らしさがわかった。

私見ではあるが、万城目学の描く物語の登場人物の心の温かさ、読後感の良さは夏目漱石に負けていないと思っている。『鹿男あをによし』以外の小説や、これから出る小説もすべて読み、万城目学のファンとしてこれからも研究を続けていきたい。

私が高校時代に感じた「現実ではありえないことが現実と巧妙にリンクしているように感じられる」という「万城目ワールド」の仕掛けについて、『鹿男あをによし』を分析していく上で予想できるものがあった。一点目は、奈良の五位堂、紀寺町、近鉄奈良駅や京都の伏見稲荷、大阪の難波など具体的な地名が多く出てくるという点、二点目は卑弥呼や鹿、狐、鼠などの神使などの歴史的事象に物語世界がマッチしている点である。このような仕掛けが「万城目ワールド」を作り出しているのではないかという予想はついたが、今回の登場人物分析、叙述分析、構成分析では明らかにできなかった。今後の課題として、「万城目ワールド」について万城目学の他の作品もあわせて分析し、その特徴をつかみたい。

また、今回の研究で『鹿男あをによし』を何度も読んでいるうちに、「ストレイシープ」や「のっぺらぼう」という、夏目漱石の『三四郎』内に出てくるキーワードとも呼べるものがあらわされているということに気がついた。本研究の第一章第二節の万城目学についてにて引用した万城目学のエッセイからもわかるように、万城目学が作品作り全般において夏目漱石の影響を受けていることから、万城目学は『坊っちゃん』や『三四郎』以外の夏目漱石の作品の要素についても『鹿男あをによし』やほかの作品に取り入れている可能性があると考えられる。夏目漱石の他の作品からのパスティーシュを探すことについても今後の課題としたい。

最後になりますが、卒業論文作成にあたり、多くの方々にご指導をいただきました。特に多くのご指導、ご助言をしていただいた野浪先生にはとても感謝しています。野浪先生の最後のゼミ生になることができて幸せです。

また、共同研究発表で作ったパワーポイントを褒めて下さったことは一生忘れません。ありがとうございました。

参考文献・URL

万城目学(2007 年)『鹿男あをによし』幻冬舎
夏目漱石(1955 年)『坊っちゃん』角川文庫
万城目学(2010 年)『ザ・万歩計』文春文庫
万城目学(2012 年)『ザ・万遊記』集英社文庫
万城目学(2016 年)『ザ・万字固め』文春文庫
万城目学(2019 年)『べらぼうくん』文藝春秋
小治田宮について
http://kojiki.kokugakuin.ac.jp/kyuto/oharidanomiya/ （最終閲覧日：2021 年 1 月 25 日）
藤原京について
https://www.nabunken.go.jp/fujiwara/ （最終閲覧日：2021 年 1 月 25 日）
福原京について
https://www.google.com/url?sa=t&source=web&rct=j&url=http://www.city.kobe.lg.jp/ward/kuyakusho/hyogo/shoukai/img/sannsaku_1.pdf&ved=2ahUKEwi5oJTp2ejtAhXCF4gKHVm4CWEQFjABegQIChAB&usg=AOvVaw3vfcq5fpcyMjV_cc-Sf1ge&cshid=1608884820006 （最終閲覧日：2021 年 1 月 25 日）
長岡京について
https://www.city.nagaokakyo.lg.jp/0000000674.html （最終閲覧日：2021 年 1 月 25 日）
難波宮について
https://osaka-info.jp/page/remains-naniwa-no-miya-palace （最終閲覧日：2021 年 1 月 25 日）
大津宮について
http://oumijingu.org/smarts/index/112/ （最終閲覧日：2021 年 1 月 25 日）
鹿島神宮について
http://kashimajingu.jp/ （最終閲覧日：2021 年 1 月 25 日）